



奈良県農業研究開発センター ニュース

2023
12
vol.165

台湾・米国向け茶生産技術の確立

～茶の輸出拡大に向けて～

黄色LED灯とフェロモン剤、二番茶後の剪枝の組み合わせ処理は、慣行防除（通常の農薬散布）と同程度の防除効果があり、生育や製茶品質についても遜色がないことを確認しました。

1. 背景と目的

国内の緑茶消費量は減少傾向にある一方、国外では、茶の需要が伸びており、台湾やアメリカ、EUを中心に輸出量が増加しています。ただし、茶を輸出するためには、相手国が定める残留農薬基準^{*}を下回る方法で栽培する必要があります。県内では、台湾向けに対応した茶の生産に取り組んでいますが、より多くの国へ対応できるよう、従来の農薬散布に代わる技術の確立を行いました。

2. 研究成果の概要

センター内の‘やぶきた’を用い、3つの処理①黄色LED灯（チャノホソガ（以下、ホソガ）の活動抑制）、②フェロモン剤（チャノコカクモンハマキ（以下、コカクモン）の交尾阻害）、③二番茶後の剪枝（秋の炭疽病の感染源除去、コカクモン幼虫の密度低減）の組み合わせ（以下、処理）が、対象病害虫の発生と収量および製茶品質に及ぼす影響を調査しました。対象病害虫以外の防除は輸出に対応した農薬を散布し、使用農薬は慣行防除の11剤から5剤へ半減しました。

対象病害虫の発生に及ぼす影響は、黄色LED灯でホソガの巻葉数を慣行防除と同等の少発生以下、フェロモン剤でコカクモンの幼虫数を第二世代（夏期）まで慣行防除と同等の少発生以下、二番茶後の剪枝で秋芽生育期の炭疽病を慣行防除と同等の少発生以下に抑えることがで

きました（図1、2）。

また、収量および製茶品質に及ぼす影響は、一番茶、二番茶ともに慣行防除と遜色がないことを確認しました（データ省略）。

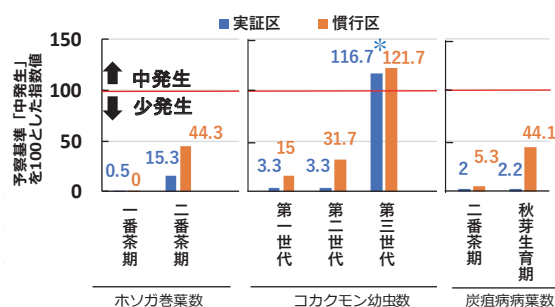


図1 処理が対象病害虫の発生に及ぼす影響
*薬効が薄れたことにより中発生



図2 秋芽での炭疽病発生状況（赤丸印：病斑）
左：二番茶後剪枝なし、右：二番茶後剪枝あり

3. 今後の展開

この生産技術を用いることで、日本の緑茶輸出量の半分以上を占める台湾・米国向けの茶を生産することが可能となります。今後は、輸出先をさらに広げるため、病害虫の発生が比較的少なく、生産者がコストや労力面で取り組みやすい一番茶生産に特化した有機栽培体系の確立に向けた研究を行います。

（大和茶研究センター 梨原嵩司）